平新報

發行日每月三回 五ノ日發行
編輯兼發行印刷人 山野邊庄吉
發行所 福島平町二丁目二番地 平新報社
廣告料五號十二字詰 一行一回五十錢 場所指定倍增
一部定價金十錢送料五厘

再び肺結核の豫防に付て〔五〕

湯本町　片岡鎌三郎

結核菌の感染は小兒期殊に二三歳に多い、従て一面から見れば、小兒病とも云ひ得る、故に小兒期に於て尤も注意を要するは云ふ迄もない、無心の小兒を將來肺結核病に罹らせる様な体格を作成するは餘りに悲慘事である、可愛い〳〵で甞め殺すと云ふ諺もある、吾人は此点に細心の注意を要する、元より小兒は感染し易いから、頻回濃度の重病人に近けぬ様、可及的日光浴中に遊ばせる、抵抗が旺盛ならしむる様、感冒に罹らぬ様、可及的石灰分に富む食物を與ひる、餘り過重の苦みをかけぬ様等の注意、夫れから離乳期の注意としては、世間一般に云はれる様に子供は長く哺乳すれば健康であると、古老から云ひ傳へられてあるが、今日の醫學からは夫は誤であつた、哺乳は一年乃至長くも一年三四ヶ月を良とする。元來母乳は一晝夜四合か五合の量である、故四五ヶ月の子供には量が多過るから搾て捨てる程だが、十ヶ月兒位になると不足する故、其頃より離乳の準備として牛乳重湯玄米粉煎汁煎餅カルケツト、カステラ、ビスケツト等や、南瓜の黄い部分、人参をおろしにかけ味を付けてやる、之れは尤も大切な事で、其の黄い部分…カロチンと云つて、血色素になる成分が含まれてある、之等補助食を初め一日一回位七日なり十日なり次て一日二回にする、三回にして母乳の回數を減ずる元來哺乳の回數は、三ヶ月兒迄は、一晝夜六回、四ヶ月から五回を標準とする。

例令三ヶ月兒迄は

朝六時　九時　十二時　三時　六時　九時　夜間授乳は決してやつてはなりません、次で四ヶ月後は

朝六時　十時、午後二時　六時　十時

夜間授乳せない事が肝要である、補助食を一回やれば授乳は四回、必ず回數を誤らぬ様、即初め三時間隔て次は四時間置きとする。次で常食に移る、十二ヶ月を離乳期とするが、若し離乳が憂ならば、秋迄延期する、夏は腐敗不潔になり易いからである、以上若し補助食をやらぬとすれば、營養不足、乳を飲みつゝ饑餓状態を續け、圖らず營養不良に陷れ、大害を釀すは賭易き道理である、尤も恐るべきは結核乾燥症角膜軟化症で忽ちに失明する、此種母の無智から來る失明は可なり多いと云はれてある、早く氣付て肝油をやれば多くは治癒するが、實は恐る可き育兒上の過失である許す可らざる無智であるまいか、夫れから二三歳、四五歳と授乳すれば母体の爲めにも子供は勿論抵抗を弱くし、生長後に肋膜炎肺結核に罹り易い体質となる、夫れから人工營養とて牛乳重湯米の粉等で育てるのは非常に惡い、殊にミルクで育てるのは尤も不合理である決して廣告などに誤られぬ樣、お互に注意が肝要だ。夫れは三ヶ月迄は斷じて人工營養は不可であり、体重三チグラム以下の子供は、人工營養に適せない無理にせば虚弱者となり、抵抗力弱く、凡ての病に罹り易く罹れば哺乳兒より長くかゝる、萬々止を得ざれば小兒科醫の監督下にするがよい小兒期の食物は發育上、石灰分を要するから骨の質の食物例ひば、雜魚鮒、ワカサギ、鰯の骨ごと食べる昆布ワカメ、ホーレン草等の青菜類を與ひる樣にしたい敢て鶏肉だ卵だ牛肉だと誤つた滋養をとる必要はない半搗米は結構だが、止を得ざれば七分搗がよい、元來米は九層から成立する、其の中心部は精白の部は、單純の澱粉質で、葛の粉など撰ぶ處はないのである、先つ吾人は多種多樣、已が慾する食物は、即ち自巳の滋養である、故に滋養食とは個人により相違するので誰が云つたか昔から、肉だ卵だ牛乳だと、斯る誤つた滋養は無い、元來滋養食と名付けたのがそもそも誤りの基となる。

藻潮かく人に答ふ

甲狀腺肥大症は原因多くは不明なるも神經の過敏性者に多きは事實なり。

(1)單純性甲狀腺肥大
(2)バゼドー氏病

二種あり乙は眼球突出心動亢進を伴ふ甲狀腺は內分泌關係があるから腦神經の調節作用胃腸の障害營養神經障害等維多の關係を有す故早く博識の醫家診斷肝要です本病は學問的には非常に興味ある多岐多用中々寸紙に盡し難きを遺憾とす。

內科 外科 一般診療
片岡醫院
片岡鎌三郎
湯本町驛前

植田町 本町
森合齒科医院
森合芳男

X光線科
[illegible]醫院
平町南町　電話一二九番

祝平新報之發展

石城郡銀行組合

諸金物 度量衡 農機械
平町研町
宗像國治商店

打綿類布團製造問屋
平町研町
吉村安次郎
電話二五七番

平町會議員
遠藤林松
平町長橋町

柏原真吾

崎川久一

カマボコ製造 藤市號
遠藤市松
平町二丁目　電話三〇五番

阿部唯次

洋品
鶴屋商店
平町四丁目　電話一四〇番

吉橋亀松

植田水力電氣會社
助川新三

鈴木長之進

佐川三郎

染物業
草野七五三之助
平町鎌田町

新妻盛

四ツ倉銀行會社組合

平町田町
高久病院
電話五三一番

銘酒
由良乃助
特撰
（他の外來酒に比し絶對に遜色なし）
壹升瓶詰　一本　壹圓四拾錢（空瓶交換レッテル付）
壹斗樽詰　一本　拾貳圓（樽ヌキ）
「但從來の瓶詰價格並に空瓶交換の方法は從前の通り」
平町四丁目驛通り
永山酒造店總發賣元
電話二〇七番

春衣大賣出し
春の催
◆スター好み春衣モス着尺陳列
◆帯皮陳列◆銘仙陳列◆富士絹陳列
◆七彩會友仙モス陳列
◘御進物に優美なる丸龜商品券
◘祝儀物萬端揃ひました
◘何でも間に合ふ不祝儀物は丸龜へ
(龜)
中野呉服店
平町三丁目　電話六十七番

內科 小兒科（院長毎日診療）
院長　醫學博士　難波睦
副院長　醫學士　五十嵐雄二
內科部長　中西林藏
外科 內臟外科 整形外科 レントゲン科 專門
外科部長　醫學士　氏家憲介
毎日曜手術　醫學博士　鈴木退輔
產婦人科 女子泌尿科 レントゲン科
產婦人科部長　醫學士　五十嵐雄二
顧問　醫學博士　川添正道
X光線科
主任　醫學博士　難波睦
本院醫事法制囑託　法學士　岡蕃
本院主事　賀澤忠治
御大典記念事業トシテ
一衛生試驗所（共濟病院內）
一病氣相談所（共濟病院內）
一救療所（共濟病院內）
磐城共濟病院
平町　電話六四一番

新學期通學服
黒小倉　二圓二十錢ヨリ
上ヘル　四圓五十錢ヨリ
上サージ　四圓二十錢ヨリ
其他各種入荷
なかや洋服店
平二、電話二〇三

理化學研究所製
吸入用酸素・酸素吸入器
優良ナル理研ノ酸素ノ御用意ヲ
平町四丁目
關內藥舖
藥劑師　關內榮助
電話四〇番

磐城セメント代理店
西村屋藥舖
平町二丁目　電話長三番

流下藥
（秘密に譲ります　無効返金　金四圓　頑固用金七圓）
月やく止まり心配の人は安心確實無害に流下し目的を逆する當局發賣の强烈特殊藥『カブギン』を用ひなさい。
某店の如く無責任藥は賣らぬ
高き醫療より安い藥劑師へ
特に平田町宇佐美藥局に

醫藥分業の標語募集
一等五圓貯蓄債券（以下略ス）四月三十日迄
用紙ハガキ

塗料大勉强
クレオソート（一、三〇）
コールタール（一、三〇）

磐城 湯本
温泉旅館
松柏館
電話五番

內科、小兒科、皮尿科
藤沼醫院
平町紺屋町
電話五〇七番

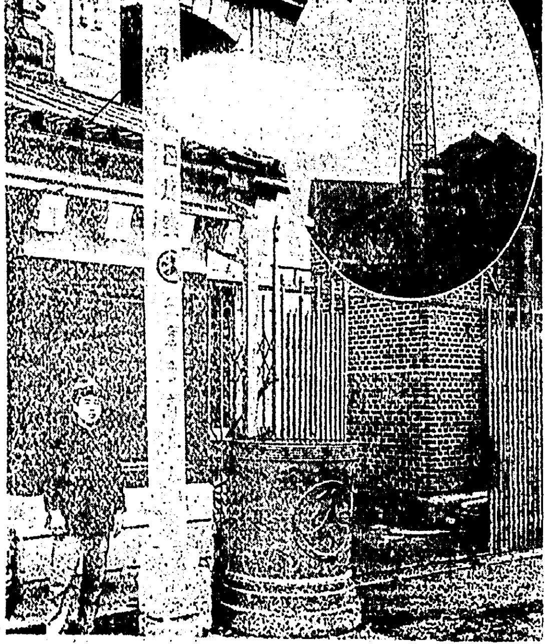
植田町
片岡醫院
醫院長慈恵學士　片岡章
電話一〇七番

日本石油株式會社特約店
平町二丁目
油問屋
關內油店
關內正一
電話長八十六番 三十九番
支店　郡山市驛前 電話三二八番
支店油槽所　茨城縣多賀郡本驛前　電話三七番平關

別府温泉より生れた
特許願濟第八九三一號
神經痛 リウマチス 肩のコリ 腰のイタミ 凍傷 過勞性筋痛
の靈藥
温泉エキス
（一名あんまいらず）
◘皆樣是非お試し下さいませ
此外用温泉エキスは今迄且つて世の中に無かつた神秘的の妙藥であります連續使用しましても副作用がありませんのと効力が確實な事とは他藥品の比ではありません
論より證據
◘皆樣一度無料で實驗して下さい
そして如何に効力があるかお認め下さい
發賣元　株式會社　日本鑛泉研究所
東京府大井町一〇七〇番地
電話大森二四八二番
振替東京七三三六七番
定價　五十錢・壹圓
特約店　平町五丁目　山野邊藥局
藥劑師　山野邊東次郎

書籍文房具類の御用は
平町貳丁目
清水屋書店に
電話百参拾壹番

磐城セメント特約販賣店
石綿製セメント
朝日煙突
耐水　耐火　美麗　廉價
サビナイ　ヤケナイ　クサラナイ



和洋銅鐵金物
平町五丁目
(久)
釜屋商店
電話九番 一三九番
振替貯金口座東京一〇九五六番
◆良品廉賣に勝る商略なし　確實敏捷は(久)の生命なり

噫恩師松本午次郎先生逝く

山口縣小郡高女　北　條　重　直

安達中學校長正六位松本午次郎氏病氣中の處去月二十五日永眠され同三十日同校にて校友會葬を以つて執行郷里茨城縣多賀郡松原町安良川の實家にて本月一日本葬を行ひる由である左の追悼文は磐中十八回卒業生にして目下山口縣小郡高女に教鞭をとりつゝある元磐中教諭北條猛次郎氏の長子重直氏より寄せれたものである。

噫、恩師松本午次郎先生逝く、萬物春ならんとして、突如、この一報は、我に執りて悲痛限りなき報知なり。一片の端書を手にして萬里、先生を想ふ。

先生 と我と、只それ師と生徒との間に過ぎず。磐中在學の二年間、國文の講義を受けしことゝ、卒業後御厄介になりたるに過ぎず。されど先生の御指導と厚情とは、我をして失禮をも顧りみず一文を筆せしめずして措かざるなり。

先生 の履歴は我が知る所に非ず。只先生は、炎城縣多賀郡松原町の出身にして出でゝ茨城師範に學べること、先生授業の餘暇に語りしところなり。炎城師範は水戸の舊城跡なる古杉鬱蒼たる中に在り、先生の學生時代たるや、熱心なるクリスト信者にして、日曜日ごとに寮を出でゝ水戸仲町なる教會に通ひしものなりとて、暗に現代學生の宗教心薄きを憂ひ給ひしことありき。そを聽きゐるクラス一同の抱ける感は我に於て知るところならねど、我が故郷水戸なる、かの森の學校而して靜かなる水戸の市街をバイブルを抱へたる若き求道者なる先生が熱心なる教會通ひの姿の我が面前に彷彿として逼り來るを覺えて我に執りて興措かざるものなりき。

高師 在學中の先生の御消息、勿論我が知るところならずも、現文學博士中村孝也氏は先生と舍室を同うし、先生の最も畏敬せし友なりと云ふ、氏がその專攻の史學に造詣深きが上に文章の妙、學生中既に嶄然頭角を現はし必ずや第二の樗牛たらん、而してその著『源九郎義經』は諸君の是非一讀すべき好著なりとは先生授業の餘暇に語るところなりしが、當時我は大枚を父にせぶりてその日直ちに淸光堂に走りて一本を注文したりき。而來先生が薦められしその書は未だに我が本箱にあり。而して中村孝也は先生が豫言せるが如く果して現史壇の異才にしてその文章は二代目の樗牛なりと評せらるゝに至りぬ。

磐中 にて我に執りて最も興ありし授業は河上先生の英文解釋と並びて松本先生の國文教授なりき、先生の國文の教授たるや訓話それのみを以て汲々たる如き尋常の國文教授に非ざりき。作者を語り、作品を解剖し、或は各時代の作者の著書を持ち來つて、實示し望む者あらば幾日にても貸し與ふ。文中に表れたる時代の風俗や繪畫の如きはよく材料を整へて一々說明を加へられき、しかもその文學談たるや、先生の實際に當れる活ける經驗もて、米國青年の思想に及び或はラブストーリーの解題に及ぶ。しかも先生の談たるや眞劍にして一系亂れず一同思はず謹聽する態のものありき。

尚、 當時俳壇に一新機軸を出したる碧梧桐一派の新傾向の俳句を教はりしも先生なりき先生夙に俳名あり號して馬城と云ふけだし御名前の韻をとりしなり。かくの如くなれば級中文學を好める者は期せずして蕪生の思ありき、これ隱れたる文學愛好家連が自然親しみ合ふに到りたる所以なり四年級の冬と覺ゆ、一日、愛好家連集りて回覽雜誌發行の議定まりぬ。會する者井出利一、小野知夫、赤津久、山野邊喜一、大森義夫君等の面々なりき。何んと名づけしか今忘れたれど謄寫本にて第二號まで出したりき。その一本をば我、授業濟みし後先生を追ふて教員室近き、薄暗き廊下にて先生に呈せしが、後日夜分先生と搔槌小路邊の道路にてお逢ひし、連れ立ちて歸る道すがら『先日のはよく出來た、しつかりやり給へなどと御褒めの言葉をいたゞきしこと今尚我が耳底に殘れり。

當年 の級友井手君は法政大學英文科を卒へて東都に某文藝雜誌を宰して今名あり、小野知夫君、文を捨てゝ生物學を專攻し今、二高教授の榮職に在り、赤津久君は聖路加國際病院に內科の國手として靈腕を振るはる。大森君の洋畫に於けるはこれ世間周知の事にて今更喋々を要せず、山野邊君永く東京住友銀行に勤務せしが近頃家事上の都合にて歸鄉し家業にいそしむと聞く。何れも是れ當年の文學熱愛家にして、河上、濱島先生に引率せられて日光修學旅行の時の如き、名産の日光羊羹の代りに町の古本屋にて、しこたま文學書を掘り出して持ち歸りたる面々なり。

當時 先生は舊城跡に御母堂と只二人の靜かなる御生活なりき。先生の談たるや、授業中既に興津々たり。されど我等茶目連、何ぞそれのみにて已まんや。或日の休講時間の日向ボッコ會議に確か茶目の頭目鴨瑞雄君と覺ゆ、提言して曰く、一つ先生の宅に菓子食ひに罷らうではないかと、衆議直ちにして一決し、土曜日の夜を期して一同參上の手筈なり。茶目の名曰く鴨、赤津、秋山理、西村政雄、西村信淸、飯野胖と我の七名なりと記憶す、先生の御宅に參ずれば母堂と對座して晩餐中の先生の夫子然たる姿を見たり。座すれば先づ床に並べられたる有朋堂文庫の金文字の羅列に讀書家たる先生を偲びき。先生歡待措かず、茶目連が大好物たる松月の菓子は山盛り運ばれたり。さすがの茶目猛者も、おじけが出て喉の手はいざ知らず、本物の手は出ざる有樣なり。先生茶を入れに立ちし時、こゝぞとパク付きしは鴨君なりき。それより、文學談、洋行談、ことに數多き珍らしき寫眞を一々その撮影の由來を語りて下さるゝに、先生の來歷を偲びて興措かざるものなりき。噫、當年の茶目、鴨君は慶大法學部を卒へて間もなく不幸病歿に倒る、西村信淸君亦早大商學部卒業に近くして不幸急病に倒る。西村政雄君慶大經濟學部を卒へて今、三井銀行外國課に敏腕を振るはる、秋山理君は東京齒科醫專を卒へ東京に開業し、傍ら熱心に飛行機の研究に沒頭し操從の妙技に熟達せりと云ふ。飯野君現會津高女教諭として活動さる。大森義夫君第一回帝展入選の際、現會津中學校教諭なる長谷川卓君の主唱にて我等級友中の有志集りて星製藥の食堂にて同君の爲に祝宴を張りしことありしが、かの時の記念撮影の一は松本先生に呈したるなりき。

我の 先生にお目に掛りし最後は、實に大正十五年九月二十三日なりき、先生、我の爲すなき人間たるをも顧みず、我をして福島縣の某中學校に世話して下さるとの招電に接して當時安積高女校長の職に在りたる先生を訪ひし時なり。これ實に先生と九年目の對面なり。我は先生其後の變遷と校長振りとをくさ〲に想像に盡きつゝ遠く郡山迄出立せしが、校長室におさまりて慈父の如き迫らざる態度、而して靜[illegible]夫子の如き先生を見たり。當日は秋季皇靈祭にて當校にては敬老會を催せるなりとて、先生はフロック姿なりしが早速我を誘ひて校舍を案內して下されしが、我に先立てる先生の步き振りの、垂れし兩手をひたりと兩側に附けたるまゝ速足に步まるゝ樣も昔ながらと微笑まれしが、廊下に落ちたる紙屑を一々腰をまげては叮嚀に拾ひて幾度か屑籠に投込まるゝには、從ふ我はまことに聖者の如き校長振りかなとつく〲感銘しき。これ先生にして誠に自然なる校長タイプなりと思ひし。それより、郡山の名所を案內して下されしが、先生もと俗塵を好ます、故に尋常なる建築物等へは誘はずして郡山郊山磐臺の秀峰の仰げるところ、尾花の穗の白金の如く夕日に映せる原野を過りて、靜御前の古祠を尋ねその由來など承り、或は芭蕉が奧の細道を語り、久米正雄が作『牛乳屋の兄弟』のモデルを語り、先生亦その主人公の家に宿りしことありと云ふ、或は女流作家中條百合子が出世作『貧しき人々の群』に表れ來るはあの邊りなどゝ、文學と自然と先生の談は興盡きぬものありき。かの芭蕉が奧細道の旅行にて白河なる等躬の家を出でゝ郡山に向ふ道すがら『沼を尋ね人にとひかつみ〱と尋ねありきて日は山の端にかゝりぬ』とありて、蕉翁は遂に終日その憬るゝところのかつみの花を見出すを得ざりしが先生頃日その『花かつみ』を探し出せし由にて、珍らしければ之を皇后陛下に献上し奉りしに早速御嘉納ありきなどと語られし。

先生 讀書、しば〱夜を徹し最近は不眠症に罹れりなど申し居りしが、今度の御不幸や或は先生過度の讀書に因するところに非ざるなきかを憂ふ。

噫、花開かんとしては風起る、先生、齡不惑を超えしのみ、益々圓熟して、その聖者の如き人格をもて教化の事業に臨まるゝ日を期待せしものを、我れ今本洲の最南端に在り、親しく先生の靈に手向くるを得ず、而も先生を思ふの情惻々たるものあり、こゝに拙き一文を綴りて先生を偲ぶ。願はくは先生、御郷里常陸松原町の靜かなる波の音にやすめかし。

昭和四年三月二十八日記

活耳目

北新紙上に表はれたものが高月臺生であらふが民友の佐藤君であらふが對者は同紙の持主たる河北新報平支局の横山君である又横山君が北新を監修せぬ筈はあるまじく殊に高月臺生が横山君でないとしたならばその卑怯なる心事と手段を笑はざるを得ぬ、假りに民友の佐藤君としたならば何が故に何のために本紙と筆者の惡口を北新紙上に載せたのか、新撰組の誼みでの挑戰か、一度惡口をし挑戰し置きながら寸毫も敵意はないとは嫌れて君等の氣持ちが判らなくなる。

一、本紙前號の『活耳目』は山田民報子の辯護と横山君の惡口で『之れに對して批判は避ける』との事だが何故避けるのだ？？等附せヒヤかさず、それこそ正々堂々書くべきである、筆者は繰り返す樣なれど横山君が山田が書かしたと吐いたとの事だからそうでないと山田氏のために釋明したのだ横山君！そんな寢言はなかつたと言ふのか、又それは感違ひであつたと謝罪するのか、

一、同業、日刊、の反目の溝を深くすると考へたとせばそれ程の誠意があるなら東京日々新聞相本氏に對し記事を『誤報』としての惡口はどうだ又何が故に磐城新聞のかみくづに對して、葬れとか何とか特大のミダシを附して書くのだ、磐新の紙屑が惡いとしてもかくに程がある、同業者は相提携して善進するこそ同業者の地位を向上さするといふものである、此處ら君等の言行が間違つて居るといふのである、

一、磐城セメント問題の眞相を書いて欲しいと言ふなら書いても良い、該件で筆者が一人で負はねばならぬ等と申して居るが負はなければならぬなら男らしく負ふが筆者の關係せぬ事だテ其處を説明し給へ、

一、筆者と磐中に何等誓約なんてないよ、筆者は磐中出身と本紙の讀者が磐中出身者が多いにあるのだ、それを利用せようとせまいと君等から、質される必要がない、紅筆の件も然り、觀る人の眼に任して置き、毎晩行かふが行くまいが叶家等へ××××はせぬから安心し給へ一体北新のポストはどうだ、果して自作のポストを載せて居らぬか、見る人が見たらプリズム的に判つて居るテ、新聞を批判するなら全班を視て公平に批判すべし、花柳記事や他の一班を視ての批判は君等が間違つて居るといふもの

一、假りに高月臺生として横山君の迷惑となるからとの事なるが迷惑と知つたら何が故他紙の惡口をかき、北新に掲載したか、これ一に横山君の發意であると斷定するのである、兎に角筆者の採つた應戰の筆は決して間違つて居らぬ、寧ろ君等の筆が間違つて居るのだ筆者は正々堂々と書いて居る、進んであから樣にかけといふのか、

一、横山君との論爭の點は一体何處にある、筆者に答ふと題して居るが答ではない惡口であり棚下しである

一、山崎淸三氏の語つた件につき何等かの形で確める等と思はせ振りを言ふて居るが言はぬ事は書かぬ、言つたらどうしたといふのだそれこそ八つ當りと申すのである

一、次に横山君が各所にて筆者の惡口と信用毀損をなして居るが一体何の目的なのだ、一例を揚ぐれば釜屋商店に至りて『あんなもの養つて置くからどうの』と惡口申し營業防害をなし居つたが實に言語同斷卑怯なる無禮極まる男である。

一、要するに横山君が本紙前々號の『動中靜觀』を觀て感違ひした事によつて端を發して居ると筆者は推定するから、その件を前號に明記し又山田盤廣氏がどうのと感違ひして居るからこれも前號で明記したそれでも判らぬなら人は觀る人の眼に依つて異るであらふから君等の判斷に任して置くとして陰で許り筆者の惡口を吐くは男らしからず加ひて高月臺生等の匿名にせず署名さするなり君が書くなりすべきで北新といふ新聞を持つた君だから男らしく當つて來べきである、一亘筆を持つ者が筆を持つ者に挑戰した君だ、今更相互に筆を擱く事もなるまい、又高月生とか本紙への批判は決して新聞の價値とか文法とか文章から來た惡口ではない事は何人が觀ても判つて居る、文法上ならば初めから文法で來ぬ、今更文法の文法なら高月臺生自身が新聞の價値等と逃ぐべからず自分の文章をよつく省みて『誤植であらふが』人を批難する前に今少し勉强して眞面目に出直して來べき樣君から注意すべきであらふ。

眞　立

町長選擧を中心に
候補者略內定の
四ッ倉町議戰

四ッ倉町長選擧も決まらぬ所へ町議改選が迫つた四ッ倉町では、定員拾八名の所へ立候補せんとせるもの略出揃つた模樣である、殊に町長選擧が延引されつゝある關係上相當其黨派的に亂鬪は免れまいと言はれて居る、今下馬評の人々を列記して見るに

本町　金成岩吉『民』佐藤熊藏『民』横田民彌『民』小港宗吉『民』新妻謙『民』門馬倉次郎『政』須藤久太郎『民』

中町　新妻盛『政』中野拾與次郎『民』長谷川西次郎『民』長谷川寅次郎『中立』

新町　大和田安太郎『政』長谷川豐之助『政』豐田盛治『政』菅波末吉『政』面川龜之助『民』吉田彌十郎『中立』吉田壽三郎『民』起否未定の人に竹永元吉『政』

右の如き顏觸れにて立候補確定の人二十名あり、うち民政黨拾名、政友會八名中立二名といふ事になり、これを町長選擧に觀るに民政黨は前町長、現助役を推して二分され、政友會は新妻氏を推して居るのであるが種々の關係上町長選擧は新議員確定まで保留さるゝものか兎に角四ッ倉町議戰の顏觸れ決定は早いものである。

菊多會主となり植田驛に
準、急行列車其他の
新設運動開始

植田町は下り列車に不便はないが上り列車が夜間掛きため不便此上なく湯本止りの延長と準、急行列車を設くべく今回菊多會にてそれが運動を決議し目下新會長齋藤治尾氏其他役員が運動に着手し地方民の協賛を求め追つて水戸運輸局其他當局に設置方の運動をなす由である。

磐中出身
同聲會例會
役員の改選

植田、錦、山田一町二ヶ村磐中出身者を以つて成る同聲會例會を去る三月十六日夜植田町山田屋本館にて開催出席員二十余名各會員のかくし藝あり頗る盛會であつた、該會には役員の改選あり幹事として小野保、森合芳男、高木武一郎、布施宗の四氏選ばれたと、此處に會員のかくし藝の主なるもの紹介して見れば、◆村松君のサノサ踊り、◆篠原校長のありあけ節、◆小野五一氏の左官助手は布施宗氏、◆布施氏の萬歲、◆小野助役の都々逸、◆綠川秀男氏の鈴木主水の踊り、◆前田淸美氏の相馬踊、◆齊藤直一氏のざゞいつ等。

四ッ倉在軍
臨時會合

在郷軍人團四ッ倉分會にては去月二十五日午後七時より同町小學校に於て會員約四十名會合問題化されつゝあつた基金費途につき種々協議をなしたが激論のみにして何等やましき事はなかつたと。

御斷り

平町議改選を控えて各有志の所見を叩くは紙面の都合上次號に讓る

新妻家の慶事

四ッ倉町々會議員新妻謙氏長子熊男氏は今回同町小湊宗吉氏の夫妻の媒約にて夏井村青木清太郎氏長女知惠子孃と婚約成り去る一日、二日の兩日同家に於て親族知已を招きて披露の宴を張つた。因みに新郎は磐中をへて國學院大學出身にして目下二本松町女學校に教鞭を採りつゝあり新婦は磐高女出身の才媛である。

四ッ倉消防
春期檢閱

四ッ倉町消防組頭門馬倉次郎氏就任初めての檢閱は來る十日執行さるゝ由である

音信交換

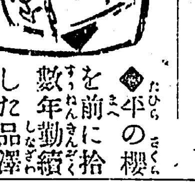
御送り下された新聞を途中で配達から受取り拜見しながら伊勢、奈良、大坂、廣島と步いて來ました、この廿四日から臺灣に行き左記のところに約一ケ月居る豫定です關西方面の農家の土地の利用の上手なのには感心しました、これから少しづゝ農家を歩いて見る考ひで居ります臺灣には隨分面白い事も御座いませう故いづれ臺灣にて

三月二十二日

臺灣臺北市書院町二丁目　高木友枝方

高　木　善　枝

◆因みに高木氏は磐中廿二回卒業生にして劍道二段渡邊村の人である。



◆平の櫻を前に拾數年勤續した品澤の小金姐さん平を去つた行先は東京とか。◆同じく二葉家の松葉姐さん九州方面へ去つた由である。◆竹の家からは例の君子が千歌丸と名乘つて半玉の披露目は近いうちとの事目下御挨拶中。◆榮家へ先頃出た妓は深雪と申し水戸より。◆去る夜十錢の木戸を御客にオゴラせ有磐座へ御全伴三名の仲家の福助親の時より子の時なりと新發見の壓搾器で御茶よ菓子とヤッテ居る內に資本家たる御客白河の夜船とキメ込む福助曰く眠むでは嫌よ御申譯がないわ、誰にさ松川の御大に。◆開花の友奴、一の井の奧座敷で普選（婦選）の御講演は最近のケッ作でしたね。◆三好家のあぐり、去る夜賓來亭で濟南事件の經過報告を誰に物語つて居たのさまさか小路のセイさんではあるまいね◆轉任以來精銳なる斤候戰の賜物か、天理教の御利益か三島家の菊千代、最近〇て出來て平は磐城の帝都ナンて御世辭を云つて居ると或の朝玉木愛石流の達筆の芳書一通が到來、卷紙約ニメートルの中央に曰く『菊千代なくして我れに人生なしと思ふ』と認めあつた菊千代其の鑑定料大枚二圓の彌助を舊發したから豪氣さ◆大天狗の久本の久松去る夕暮れ、大和家（阪東大助丈）の定紋付で羽織右手に舞扇子を持ち横町の梅月に姿を現はし茶めし八杯と芋ののオデン三皿を平げ、芋の味は格別だと誰の〇だ、新川町のキの字の〇か。◆竹の家の花蝶、最近八ツ目鰻を御所望なソーダ、〇〇にでもなつたのかアラ厭だわ性エネルギーの補充なのよ。◆升美姐さん去る廿八日尼子の藥劑師連の宴會席上で曰く、くすりは能書程にきかぬなど〻無駄を飛して居たが姐さん稅金程のごなしと心配して居た醉人もあつたけ。◆谷口の小染平館の波浮の港は御全伴で御樂しみね、但し四本では可愛想にも思ひます。

櫻花に魁する
藝妓演藝大會

磐城時報主催、磐新、常毎兩社後援の下に藝妓演藝大會を明六日午後六時より平町聚樂館に於て開催さるゝ事になつて居るが時節柄前人氣頗る盛んにして平の櫻花に先ち當夜の盛況が思ひ遣らる。

平信組合問題解決

物議中であつた平町信用組合の問題は兩派種々協議中であつたが諸橋守次、若松美三、鈴木辰三郎、三氏の調停により◆大谷前組合長は總代會決議に基つき顧問として優遇の途を講ずる事、◆事務引繼後前組合長の功勞を認め以前の事務に對し深く追究せざる事、◆前役員及び新役員は協力一致組合の發展に力むる事として四日夜解決せりと